

<レポート>

## WEA 会長時代の R. H. トーニー ——1928～1945 年におけるイギリス成人教育の指導者の功績——

NPO 法人全日本大学開放推進機構 研究員 香川 重遠

### 1. はじめに

R. H. トーニー (Richard Henry Tawney, 1880-1962) は、経済史家、ジャーナリスト、中国研究家、社会思想家などとして知られ、労働党のブレンも務めるなど多方面において功績を残したが、その経歴を見ると生涯のほとんどをイギリス最大の成人教育組織 WEA (Workers' Educational Association) において尽力した人物である<sup>1</sup>。

トーニーの成人教育との出会いは、オックスフォード大学ベリオール・カレッジ卒業後にイギリス初のセツルメントであるトインビー・ホールに赴任したことにあった。トーニーはトインビー・ホールにおいて WEA 創設者 A. マンスブリッジ (Albert Mansbridge, 1876-1952) と邂逅し、すぐに WEA の執行員の一人となった。1906 年にトーニーはトインビー・ホールを去り、以後は生涯を通じて主として WEA での成人教育の普及に従事した。

トーニーの WEA での活動始めは、WEA が先駆的に実施したチュートリアル・クラスにおけるチューターの実践にあった。このチュートリアル・クラスの成功を契機として、WEA は全国的に発展した。その後、トーニーは 1928 年から 1945 年にわたって、WEA の 2 代目の会長を務めた<sup>2</sup>。テリルは 1930 年代の WEA を「トーニーの十年」と評し、「トーニーはイングランドの成人教育の指導者となった」と述べている (Terrill 1973 : 84)。本稿では、トーニーの WEA 会長時代を振り返り、とりわけその多方面にわたる功績についてとりあげたい。

### 2. 労働党のブレンとして

---

<sup>1</sup> トーニーの研究業績の中心は教育にあり、生涯にわたって教育に関する論文を 200 本以上発表している (Terrill 1973 : 293-301)。

<sup>2</sup> WEA の初代会長は後のカンタベリー大司教となった W. テンプル (William Temple, 1881-1944) であった。トーニーとテンプルは、ラグビー校とベリオール・カレッジの先輩後輩の間柄であった (Winter and Joslin 1972 : 68)。

トインビー・ホールでのイースト・エンドにおけるセツルメントの実践は、トーニーに成人教育だけでなく社会主義への傾倒をもたらした。ライトはトーニーにとってトインビー・ホールでのセツルメントの実践が重要であったことは明らかであるとし、「そこには貧困と社会的困窮だけでなく、イースト・エンドの労働者階級の連帯や『人間中心主義』(‘humanity’) (当時のトーニーの言葉) を経験する、直接的な接触があった」と指摘している (Wright 1987 : 4)。

トーニーは 1908 年に労働党に入党し、1918 年、1922 年、1924 年と計 3 回労働党の公認で出馬したものの落選してもいる。トーニーは労働党の政治家となることはなかったが、労働党のブレーンとして政策・綱領の作成や党の依って立つ社会主義思想の確立にも多大な貢献をした<sup>3</sup>。

WEA 会長に就任した 1928 年の総選挙時には、トーニーは労働党のマニフェスト『労働と国家』(*Labour and Nation*) を執筆し、労働党の勝利に貢献している。テリルは、『労働と国家』というタイトルは、労働者は、その社会主義を、イギリス国家が従うべき最高の理想として恥じることなく提議することにより、ひとつの階級や政党としてではなく、国民として堂々と登場すべきであるという彼の信念を表現していた」と評している (Terrill 1973 : 63)。

1930 年にトーニーは労働党の顧問となった。ライトは、「トーニーは (コールやラスキと共に)、労働党の理論的指導者であっただけでなく、そのもっとも賢固な友人であり——大切な時には——その厳格な批判者であった。トーニーは、あらゆる意味で、黨員であった」と述べている (Wright 1987 : 25)。トーニーの労働党に対する指導者としての貢献は高く、1933 年には労働党マクドナルド内閣がトーニーに貴族の爵位を送ろうとしたこともあった。しかし、トーニーはマクドナルド首相に対して、「お手紙ありがとうございます。私は労働党に対してどのような危害を加えたことがあるでしょうか」と返答し、爵位を拒否している (Terrill 1973 : 6)。

---

<sup>3</sup> デニスとハルゼーはトーニーの社会主義思想を、イギリス社会主義の本流をなす倫理的社会主義 (ethical socialism) として位置づけ、トーニーを「倫理的社会主義の偉大な現代の巨匠」と評し、トーニーによって倫理的社会主義の伝統は「個人的達成のもっとも高度な点に達し、その議論の範囲を包括的に広げた」と述べている (Dennis and Halsey 1988 : 3)。デニスとハルゼーは、トーニーの倫理的社会主義思想の特色として、「なによりもまず、人間的、道徳的、そして宗教的であった」と指摘している (Dennis and Halsey 1988 : 150)。また、トーニーは『急進主義の伝統』(*The Radical Tradition*) において、マルクス社会主義に対して極めて否定的な見解を示しているが (Tawney 1964a : chap. 9)、こうした点もトーニーの社会主義思想の特色である。

もうひとつのトーニーの労働党のブレーンとしての貢献は、労働党の依って立つ社会主義思想の確立にあった。関はトーニーが労働党に果たした思想的影響について、「理想主義的態度、殊に社会主義は労働者が社会で一定の機能と責任を果たすことにより可能であるという理由で労働者の自覚を促す考え方や、国有化をひとつの手段に過ぎないと見る考え方が、後に労働党首になったゲイツケルやダービンらの当時の青年及び労働者にあたえた影響は大きい」と指摘している<sup>4</sup> (関 1969 : 175)。

1931 年にトーニーは『平等論』(*Equality*) の初版を発表している。トーニーの『平等論』は 1921 年の『獲得社会』(*The Aquisitive Society*) と並んで「社会主義者の聖書」と呼ばれている社会主義思想の傑作であった (Meredith 2003 : 69)。ゲイツケルは、「トーニーの偉大なふたつの社会主義の書物は——『獲得社会』と『平等論』——、私たちの世代には多大な影響をあたえた」といい、その理由を、「そこには、偽りや誇張が何もなく、キリスト教倫理と社会の現実の状態の間の対照を公にする中で、トーニーは、はっきりとわからない覆い隠すものをはぎ取り、その背後に存在するものを私たちに示していた」と、その影響力の大きさについて述べている (Gaitskell 1964 : 221)。

また、戦後において労働党の主導した福祉国家の発展にブレーンとして尽力した LSE 教授のティトマスも、トーニーの思想に誰よりも影響を受けた人物であった。ライトはティトマスを、「戦後の社会政策とトーニー門下の大御所」と位置づけている (Wright 1973 : 138)。

このように、トーニーが労働党にあたえた思想面の影響は、直接的・間接的に労働党のその後を方向づけるものであった。

### 3. 教育政策に関して

トーニーは、1922 年にすべての生徒が中等学校に進学することを提言する労働党の報告書『すべての者に中等教育を』(*Secondary Education for All*) を執筆したこともあり、1926 年には、その実現を試みたハドウ委員会の主要委員ともなった。その後、WEA、労働組合会議、全国教員組合、協同組合教育委員会を中心に教育進歩のための協議会が結成され、トーニーは会長として活躍し、「すべての者に中等教育」という理想を 1944 年の教育法によって実現した。

---

<sup>4</sup> トーニーの国有化を絶対条件としない考えは、当時の社会主義陣営においては異色であったが、20 世紀末の労働党綱領の修正によってその先見の明と正しさが立証されたといえる。

トニー自身はパブリック・スクールのラグビー校出身であったが、パブリック・スクールにはあまりいい感情を抱いていなかった。トニーは 1943 年に「パブリック・スクールの問題」という論文を発表し、以下のように述べている。

トニーはパブリック・スクールの問題点について、「異なった階層の人々を、まるで人種が違ふようにあつかう教育の組織は、〔階級間の〕相互理解を妨げる。わが国の現在のやり方は、まさにそれなのである」と否定的な見解をみせる (Tawney 1964a : 61)。トニーはそうした教育の弊害と矛盾を、「第 1 の立場としては、それは、能力について誤導という結果を生む。収入の少ない家庭の子どもは、寄宿生のパブリック・スクールがあたえているような形式の教育には、恵まれた能力をもった子どもに対し、経費がかかりすぎるために入学を阻止されている」と指摘する (Tawney 1964a : 63)。トニーは、「財産に基づく差別という、克服しなければいけない重要なものを、かえって恒久化することになるであろう」と、当時の教育制度が経済的な「不平等」を助長していると批判していた (Tawney 1964a : 67)。

ライトはトニーの教育政策に関する貢献に関し、「1918 年のフィッシャー教育法から 1944 年のバトラー教育法に至るまで、イギリスの教育思想と政策の歴史に対してトニーが及ぼした影響力は大々的に記述されている」と指摘している (Wright 1987 : 24)。

#### 4. LSE の教授として

1931 年には、トニーは 1919 年以来教鞭をとっていたロンドン大学経済政治学院 (LSE) の経済史の教授となった。当時の LSE の学長はベリオール・カレッジとトインビー・ホールでのトニーの先輩であり、義兄でもあった福祉国家の父ベヴァリッジ (トニーの妻はベヴァリッジの実妹ジャネットであった) であった<sup>5</sup>。

トニーは LSE の教授となった年に先述した『平等論』の初版を発表している。テリルは、1921 年の『獲得社会』、1926 年の『宗教と資本主義の勃興』(*Religion and the Rise of Capitalism*)、そして『平等論』の三作を「トニーのもっとも偉大な学術書」と評しており (Terrill 1973 : 73)、同様に、ウィンターとジョスリンもこれら三作をトニーにとっての「もっとも影響力のある学術書」と位置づけている (Winter and Joslin 1972 : viii)。その意味では、この時期において、トニーの主要な学術業績の最後のワンピースが

---

<sup>5</sup> ベヴァリッジとトニーがトインビー・ホールに赴任したきっかけは、ベリオール・カレッジ学寮長であった理想主義哲学者ケアードの訓示によるものであった (Beveridge 1953)。

発表されたことになる。

トーニーの『平等論』の背景には、当時のイギリスの富裕層と労働者階級との二重構造といえる社会構造があった。トーニーは、そのような不平等な構造が社会に蔓延しつつあるときにこそ、コミュニティには共同教養 (common culture) が必要であると指摘している。トーニーのいう共同教養とは、「かなりの経済的平等など——それは必ずしも金銭的な所得の同水準だけではなく、環境の平等、教育と文明の手段に接近する機会の平等、保障と独立の平等、および通常これらの平等が自ずともたらす社会的考慮の平等を意味する——を必要とする」ものであり (Tawney 1964b : 43)、トーニーはその役割を成人教育の普及に求めている。

これを裏付けるように、トーニーは WEA における成人教育の運動の実践について、「WEA は教育をまず趣味や娯楽——これは両方とも立派なことだが——とみたり、あるいは個人の立身出世の手段としてみなしたのでなく、社会の原動力とみなした」といい、

「WEA は成人教育を、『個人の人格や能力を発展させる手段としてだけではなく、社会的権利と責任の行使のための準備として』評価したのである」と述べている (Tawney 1964a : 90)。

LSE におけるトーニーの教育・研究、とくに思想面の影響力は大きく、LSE 出身のデニスとハルゼーは、「20 世紀において LSE は、トーニーの同時代人とその後継者、とくに T. H. マーシャルと、第二次大戦後まもないマーシャルのシティズンシップ論によって影響された社会学者を通して倫理的社会主義が伝えられた主要な経路であった」と述べている<sup>6</sup> (Dennis and Halsey 1988 : 3)。また、ハルゼーは、「彼 [=トーニー] はロンドン経済政治学院の形成期にその研究と教育に方向付けを与えた。それはやがて 1950 年から 20 世紀末までに地方大学に普及していった」と、その後の LSE の影響力が広範囲に及ぶ大学にまで成長したことを指摘している (Halsey =2011 : 27)。

LSE 名誉教授ピンカーは、トーニーの LSE への貢献に関して、「彼は『ラタン・タタ財団』の創設に中心的役割を果たし、LSE における社会福祉運営論の基礎を固めた」と述べているが (Pinker 1994 : 322)、トーニーの後にそれをさらに推し進め、イギリス社会学の派生として社会政策学を確立したのがティマスであった。ハルゼーは、ティマスの LSE での貢献について、「彼は一個人以上の力を発揮した。教育や研究を通じ、更に政府への奉仕を通じて、一つの独立した学問分野としての社会政策学を確立した」と述べている

<sup>6</sup> マーシャルは LSE 時代に発表した『シティズンシップと社会的階級』(Citizenship and Social Class) において、トーニーの研究をたびたび参照している (Marshall 1950=1963)。

(Halsey =2011 : 27)。

経済史研究の面でも 1941 年には、先述の『宗教と資本主義の勃興』と 1912 年の『16 世紀の農業の問題』(*The Agrarian Problem in the 16th Century*) と並んでイギリス経済史研究の傑作として高く評価されている論文「ジェントリの勃興」を発表している。経済史研究者の間では 16 世紀から 17 世紀のイギリスは「トーニーの世紀」と評されている。森本は、「R. H. トーニーの場合、16・17 世紀のイギリス研究は、イギリス労働党の線における現実社会への対決のしかたを反映しているものであり、歴史的事実を取上げるとき、それは、緊急な政策上の問題点を論じていることを意味するものである。その点、パーソリティ、宗教上の立場をふくめて、マックス・ウェーバーと比較対象せしめることもできる」と述べている (森本 1978 : 105)。

また、トーニーの研究は中国大陸にも広がっており、1930 年代初頭には 12 回の訪中をしている (Terrill 1973 : 67)。トーニーの中国に関する研究の成果は、1931 年の『中国の農業と工業』(*Memorandum on Agriculture and Industry in China*) と翌 1932 年の『中国の大陸と労働』(*Land and Labour in China*) にまとめられている。テリルは、「トーニーは中国社会を、人種、気候、文化の遅れた法則に縛られた『停滞した中国』という観点ではなく、イングランドの 16 世紀と相通じる、封建主義から資本主義への変遷という観点で分析していた」と指摘している (Terrill 1973 : 254)。

こうした幅広い高度な学術貢献を評価され、1934 年にトーニーはイギリス学士院会員に選ばれている (Terrill 1973 : 83)。

## 5. WEA の会長として

トーニーの WEA 会長時代についてメレディスは、「トーニーは絶え間なく富裕層と労働者との間の教育の隔たりを埋めようと努めた。不幸にも、彼の道徳的規範はおそらくあまりにも高すぎて、創設者の広範な願望以上に育った WEA に対して非現実的であった」といい、「WEA 会長時代を通じて、トーニーは増大する成人教育の需要を満たすことのできる新しい講師とチューターを十分に迎え入れる能力が WEA になかったことに不満を感じていた」と述べているように (Meredith 2003 : 71-2)、WEA 会長としてトーニーが抱いていた崇高な理想には、WEA は追い付くことはできていなかった面がある。

それでも、トーニーは WEA から身を引いた後、1953 年の「WEA と成人教育」という論文で以下のように述べている。

わずかばかりの開拓者が今では 21 地域に約 1,000 の支部と 10 万を超える会員を擁する全国的組織となったということ、WEA と組織労働者との関わりが年々密接になりつつあるということ、大学や地方教育局に対してもはや WEA の存在理由を説明する必要はなくなり、その大多数と気安い親密な協力関係があること、そしておそらくもっとも重要なことは、その主張が今までとは異なり一般に承認されるようになったこと、これらを想起すれば十分である (Tawney 1964a : 86-7)。

このようにトーニーは WEA の全国的な発展には満足していたのであった。

## 6. おわりに

WEA 会長時代のトーニーは、イギリス成人教育の指導者としてのみならず、労働党のブレイン、教育政策の進展、学術面の振興など多方面において功績を残した。宮坂はトーニーの功績について、「ただひとりの人物がこれほど多面的な活動をおこない、そのひとつひとつですぐれた成果をあげたことも珍しい」と述べている (宮坂 1996 : 165)。

トーニーのこうした功績の源泉もまた成人教育の実践にあった。トーニーは著名なサンクリット語学者の父親をもつ家庭に生まれ、ラグビー校を経て、ベリオール・カレッジに学んだが、トーニーが自身にとってもっとも有益な教育を受けたのは、若き頃のチュートリアル・クラスのチューターの実践時の社会人の受講生との質疑にあったと回想している (Tawney 1964a : 82)。

ゲイツケルはトーニーを、「20 世紀における成人教育のこれまでの最大の推進力であった」と評しているが (Gaitskell 1964 : 222)、トーニーのような多方面において功績を残した人物が成人教育の「最大の推進力」として尽力したことが、20 世紀のイギリスの成人教育の発展に大きく貢献したことは間違いない。

トーニーは WEA の全国的な発展の原動力を、「WEA の仕事から利益を受けていることを意識し、友人や仲間の労働者にもそれを分かち合いたいと熱心に望んでいる人びとの個人的な影響力によるものだ」と述べている (Tawney 1964a : 97)。デニスとハルゼーが WEA 自体を倫理的社会主義の運動とみなしているように (Dennis and Halsey 1998 : 170-1)、そこにはトーニーの信条であった「fellowship としての社会主義」の拡がりがあった。

参考文献

- Beveridge, W. H. (1942) *Social Insurance and Allied Services, (Beveridge Report)*, HMSO.
- (1953) *Power and Influence*, Hodder and Stoughton Ltd.
- Briggs, A. and A. Macartney (1984) *Toynbee Hall : The First Hundred Years*, Routledge and Kegan Paul.
- Dennis, N. and A. H. Halsey (1988) *English Ethical Socialism : From Thomas More to R. H. Tawney*, Clarendon Press.
- Gaitskell, H. (1964) Postscript, R. H. Tawney, *The Radical Tradition : Twelve Essays on Politics, Education and Literature*, George Allen and Unwin, 220-3.
- Halsey, A. H. (2004) *A History of Sociology of Britain : Science, Literature, and Society*, Oxford University Press. (=2011、潮木守一訳『イギリス社会学の勃興と凋落——科学と文学のはざままで』世織書房.)
- 香川重遠(2014)「R. H. トーニーの成人教育における軌跡と思想」『UEJ ジャーナル』28-39。
- (2015) 「R. H. トーニーと『1908 レポート』——チュートリアル・クラスの運営原理の確立」『UEJ ジャーナル』26-37。
- (2016) 「トインビー・ホールにおける『市民の教育』——イギリスにおけるシテイズンシップ教育の源流」『生涯学習・社会教育ジャーナル』8、近刊予定。
- Marshall, T. H. (1963) *Sociology at Crossroads and Other Essays*, Heinemann.
- Meredith, K. R. (2003) R. H. Tawney and WEA, Stephen, R. (ed). *A Ministry of Enthusiasm : Centenary Essays on the Workers' Educational Association*, Pluto Press, 59-76.
- 宮坂広作 (1996) 『英国成人教育の研究 II』明石書店。
- 森本義輝 (1978) 『イギリス社会経済史——R. H. トーニー史学の展開』時潮社。
- Pinker, R. (1994) 「R. H. トーニーの経歴」岡田藤太郎・木下健司訳『平等論』相川書房、314-25。
- 関 嘉彦 (1944) 『英国労働党の社会主義政策』東洋経済新報社。
- (1969) 『イギリス労働党史』社会思想社。
- Tawney, R. H. (1912) *The Agrarian Problem in the 16th Century*, Longman.
- (1921) *The Acquisitive Society*, G. Bell and Sons.
- (1922) *Secondary Education for All : A Policy for Labour*, General Books. (=1971、成田克矢訳『すべての者に中等教育を』明治図書。)
- (1932) *Land and Labour in China*, George Allen and Unwin. (=1935、植松佐美太郎・牛場友彦訳『支那の農業と工業』岩波書店。)
- (1950) *Religion and the Rise of Capitalism : A Historical Study*, Peter Smith

Pub Inc. (=1956・1959、出口勇三・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆 上・下—歴史的研究』岩波文庫。)

—— (1964a) *The Radical Tradition : Twelve Essays on Politics, Education and Literature*, George Allen and Unwin.

—— (1964b) *Equality : With an Introduction by Richard M. Titmuss*, George Allen and Unwin.

Terrill, R. (1973) *R. H. Tawney and His Time : Socialism and Fellowship*, Harvard University Press.

Winter, J. M. and D. M. Joslin (1972) *R. H. Tawney's Commonplace Book*, Cambridge University Press.

Wright, A. (1987) *R. H. Tawney*, Manchester University Press.

---

香川 重遠 (かがわ・しげとら)

1976 年、佐賀県生まれ。NPO 法人全日本大学開放推進機構研究員。イギリス成人教育・イギリス社会学・大学開放論専攻。主要業績：編著『よくわかる生涯学習 (改訂版)』ミネルヴァ書房、近刊予定。NPO 法人全日本大学開放推進機構会員、福祉社会学会会員、日本イギリス理想主義学会会員、生涯学習・社会教育研究促進機構会員。